

Title	昭和二十八年度秋期關西方面見學旅行記
Sub Title	
Author	高橋, 正彦(Takahashi, Masahiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.4 (1954. 11) ,p.110(608)- 112(610)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

及され、その書籍の貸借消息文から「文庫公開考」を述べられ、文庫印はその貸出にあたつて捺印されたのであらうと説かれた。

さて晝食の後、二階の陣列室を見學。主なものを舉げれば、

一、十一面觀音立像。もと稱名寺塔頭海岸尼寺の本尊。檜材寄木造白毫玉眼嵌入、鎌倉末期の作。

一、清涼寺式釋迦如來像。榿材寄木造白毫玉眼嵌入。所謂三國傳來の像を模したもので、清涼寺↓西大寺↓極樂寺↓稱名寺の關係に於いて模造されたものと考えられる。

一、銅造愛染明王像。工藝的な作品といふべきもの、永仁五年二月の銘がある。

一、北條實時・顯時・金澤貞顯・貞將畫像。絹本着色。特に實時のそれは、簡潔にして筆意の鋭い描線の底に、精神的な深さすら感ぜしめる。

一、十二神將畫像。絹本着色、一尊一幅で十二幅という他に類例の少ないもの。

一、稱名寺伽藍古圖。紙本墨書。元享三年當寺の住僧本如房湛審が結界の作法を行うに當つて描いたもの、當寺盛期のさまが窺われる。

一、金澤貞顯書寫圓覺經。紙本墨書。正慶二年三月父北條顯時の三十三回忌の供養のため、顯時の遺札を漉返して料紙とし、この經を書寫したもの。

一、文選集註。今多く傳えられているものは原本三十卷に註を加えて六十卷としたものであるが、これは更に珍しい註を加えて百二十卷としたもの。

一、明儒願文集。鎌倉時代のもので藤原資實、菅原爲長等の諷諭願文を集めたもの。

湛審の筆。

この地片假名古今集斷簡、連歌懷紙二綴などみるべきもの多く、又日蓮上人筆授決圓多羅義集一牒は珍しいものといふべきであらう。

歸途實時の墓に參詣しようとしたが、折からの雨で顯時・貞顯の兩塔婆に止めた。解散が存外に早かつたので、恰度塾の秋草文壺も出陳した鎌倉近代美術館の日本古陶磁展を見學した。(志水正司誌)

昭和二十八年年度秋期關西方面見學旅行記

金曜日頃から少し下り坂だつた天氣も十一日(日曜)には晴れ上り、先發二名を朝送り、一同はその夜七時半、急行明星にて西下の途についた。一行は間崎先生を始め、淺子、清水、河北の四先生。學生の數も七〇人近い史學科始つて以來の多人數。明くれば十二日(月)八時廿分、一同寢不足でやゝ疲れの色をあらわし丹波市驛へ降り立つた。たゞちに宿舍に入り小憩の後、一同は天

理大學へと歩を運び、館長富永牧太氏の御案内で圖書館を拜見した。圖書館は丘陵斜面に立ち、前半面は地階、一、二階の三層、後半面は地階を缺き二層、ほぼ正方形を成し、その書庫は各階より自由に入れる様設計されており、少しも陰氣なところなく、彩光の具合と云い申分ない立派なものである。藏書總數は約五〇萬とのこと、そのほとんどは人文科學關係で、詳細は同圖書館一覽に明らかにされている。我々は書庫拜見の後、午後より同大學附屬の參考館を拜見した。こゝには主として大和地方より發掘された考古學的遺物が展覽されてをりおもしろく拜見することが出来た。二時迄、昨夜來の疲れにも負けず、西ノ京に向うもの約廿五人、新裝成つた藥師寺三重塔は中天高く聳え近鉄を降り立つた我々は間もなく藥師寺金堂の前に立つた。内に入れば漆黒の光を放つ本尊藥師如來は柔かく口元を結び、鼻筋は清らかに、坐高二米餘のブロンズの巨像で、日光、月光の兩脇侍が左に並ぶ、金堂を出て本院堂に聖觀音をみた。聖觀音を護るが如く須彌壇の四隅に木彫の天王が立つている。塔婆、佛足石等をみた我々は藥師寺を去り南ほど近きところに位置する唐招提寺を訪れた。いつに變らぬほがらかな老婆の「ギリシャはオープンコロネード式」から始る説明に耳を傾ける。南面する金堂は藥師寺東塔と同じく地樺が、丸飛檐樺が角でいづれも角に若干の反りがある。組物も三斗を有する三手先である。數少い天半期の遺構の中でも後述の東大寺三月堂と

並び傑作であることは言う迄もない。中へ入り本尊盧舍那佛を始め、先年修理の際元通りに納め得なかつたと云ふ脇侍千手觀音を拜し、夕ぐれ迫る西ノ京を去つて宿舎に戻つた。
尙この日間崎先生の一行約十名は石上神宮を訪れ尊寶を色々と拜見したとの事。

十月十三日（火） 三班に分れ、第一班は間崎、河北兩先生指導の下、西ノ京より秋篠寺、法華寺方面へ、第二班は淺子先生指導のもと、奈良市内へまず博物館に赴き、數多い陳列品の中より海龍王寺五重塔模型、興福寺阿修羅等について淺子先生より詳細な解説があつた。興福寺佛頭の前で久しくたゞむ人あり、デッサンの筆をいそがしく動かすK君、阿修羅を四方より心ゆく迄眺めるO君………ゆつくりと長時間見學出來る時は別として、時間の少い時は列品全部を欲張つてみるよりも、特定のものにじつくりと腰を据えて心ゆく迄みる方が我々の場合よりよい鑑賞態度と云えるのではなからうか。

博物館を出て次は東大寺南大門を入り大佛殿へ向う、東大寺圖書館司書平岡定海師の御案内で大佛殿から戒壇院へと、その昔筑紫の觀世音寺、下野藥師寺のそれと並んで、天下の三戒壇と稱せられたもので大佛殿の混雜とは打つて變つて靜寂そのもの、訪れる人も少い。内部には塑造の四王像があり天平彫刻中の傑作である。轉害門から正倉院を一寸外より眺め一周りした我々は再び大

佛殿背後の鐘樓附近に來つた。俊乘堂に東大寺再興の重源上人坐像を拜見し、その寫實性豊かな像に一同感心して三月堂へと向つた。天平の本堂と鎌倉の禮堂と渾然一體となつてゐるこの堂は内部にも卓越した諸佛を藏して古美術の一大寶庫の觀がある。三月堂を出た我々は一應こゝで解散して三々五々宿舍に戻つた。尙この日第三班は清水先生指導にて畝傍より元藥師寺址、川原寺址、岡寺、橘寺等を見學した。

十月十四日(水) 第一班は法隆寺方面、第二班は當麻寺方面、第三班は室生寺方面へ、法隆寺班も二つに分れ、一つは法起寺より入り、一つはその逆、バスを降りた我々は遙か彼方に法起寺の三重塔をみながら畦道に入る。飛鳥の昔、聖德太子により創められたと傳へのあるこの寺も先年住職死去のあとは寺を守るものなく、荒れたまゝに捨て置かれてゐる。奈良の寺々の中にも東大寺法隆寺の如く今でも華やかな寺もあれば、一方にはこの法起寺、更には海龍王寺の如き訪れる人も稀で、ほとんど見捨てられたのもあり哀れさを感じる。塔を觀た我々は法輪寺へ向う。もう十年も前になるか落雷に依つて焼失したこの寺の塔は、今基壇だけを残しそのそばに立つ札に、塔再建の爲に御寄附をお願いすると……案内を乞うて本堂に入り、止利式とみられる本尊藥師如來坐像。平安初期の作と稱される巨大なる十一面觀音等を拜見して、天壽國曼荼羅繡帳と如意輪觀音で名高い中宮寺へ向つた。庭

内の白砂は箒の目も新しく美しい。

左指で軽く頤を支え、黒い光澤を持つ如意輪には少しも生硬さがみえず、婉麗溫雅と稱すべきものである。光背の支柱は竹竿に擬したものでこの例は他に法隆寺の百濟觀音にもみられる。さてこの法隆寺であるが、みるべきものはあまりにも多い。修理成つた五重塔、講堂内に假安置された藥師三尊、大寶藏殿で百濟觀音、玉虫厨子、夢違觀音等を拜見した。一行は五時過ぎ宿舍に戻つた。三日間に互に見學した奈良の地を去つて、十五日(木)我々は京都へ向つた。第一班は桂離宮より西芳寺、第二班は西本願寺より西芳寺、再び合流した一同は、廣隆寺を訪れるもの、天龍寺を訪れるもの、市内へ向うものと幾つかに分れた。

十六日(金) はいよいよ本旅行最後の日、前日桂離宮へ行かなかつた一行は修學院離宮より銀閣寺、他は二つに分れ、一つは京都博物館より西本願寺、他の一つは清水寺、智恩院方面へ、やがて午後二時過ぎ、それ／＼目的の見學を終えた一同は最後の見學場所三條城へ集つた。家康が伏見城の一部を移集したこの城は、内部に狩野派の金碧畫が襖と壁に描かれている。かくて午後四時解散。終りに當り、本旅行に宿舍及見學の便宜をえられた天理教中山正善氏を始め、東井三代次氏東大寺の平岡定海氏、其他見學に便宜を與えられた方々に厚く御禮申し上げる次第である。

(高橋正彦記)